

外来輸血

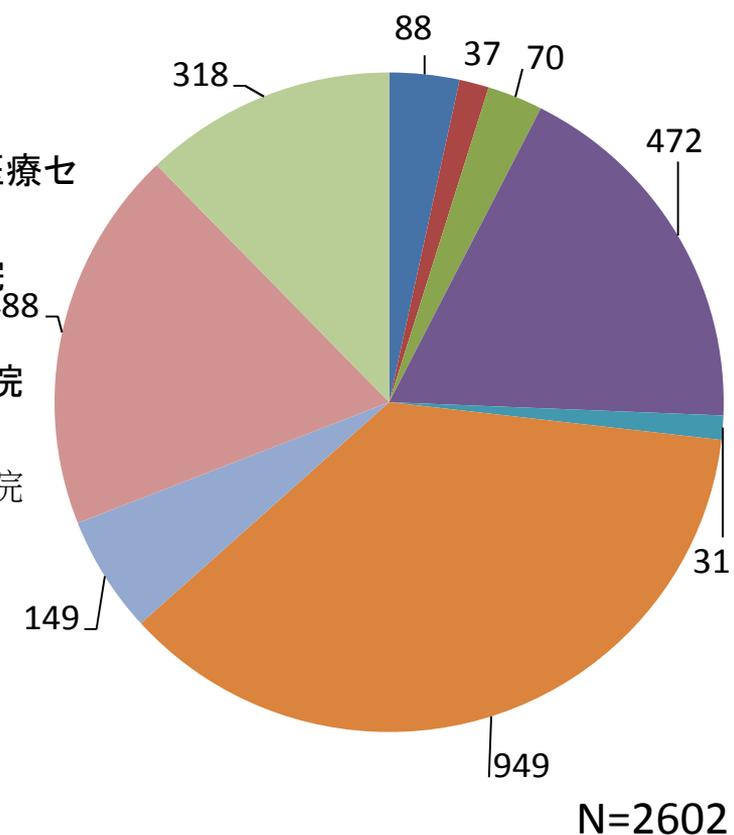
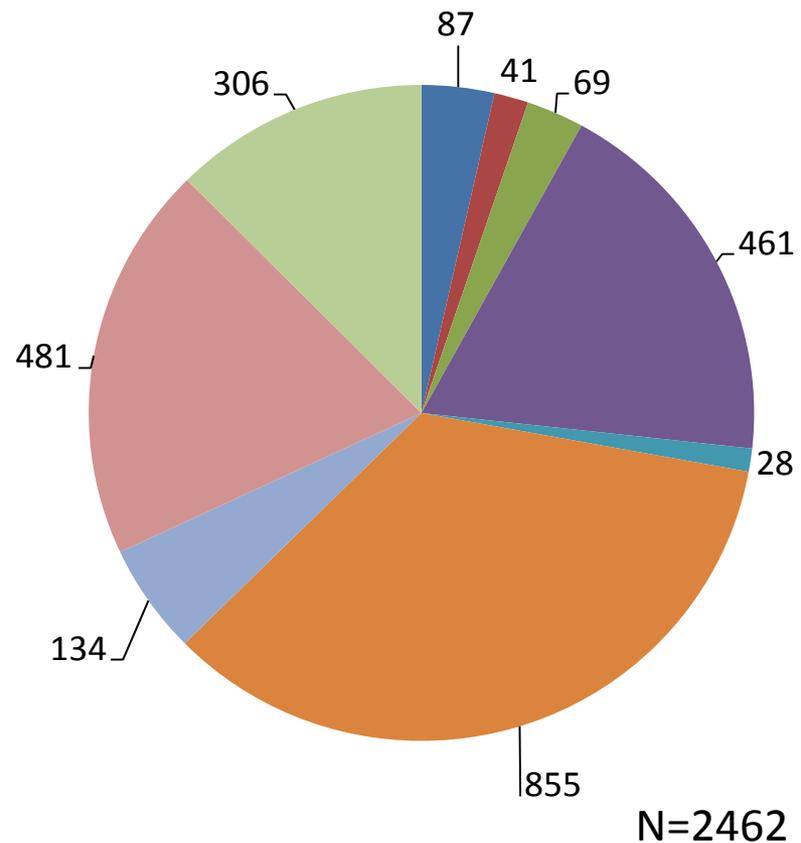
青森県立中央病院 臨床検査部
福島県立医科大学 輸血・移植免疫学
北澤淳一

外来輸血を行っている施設形態

H27

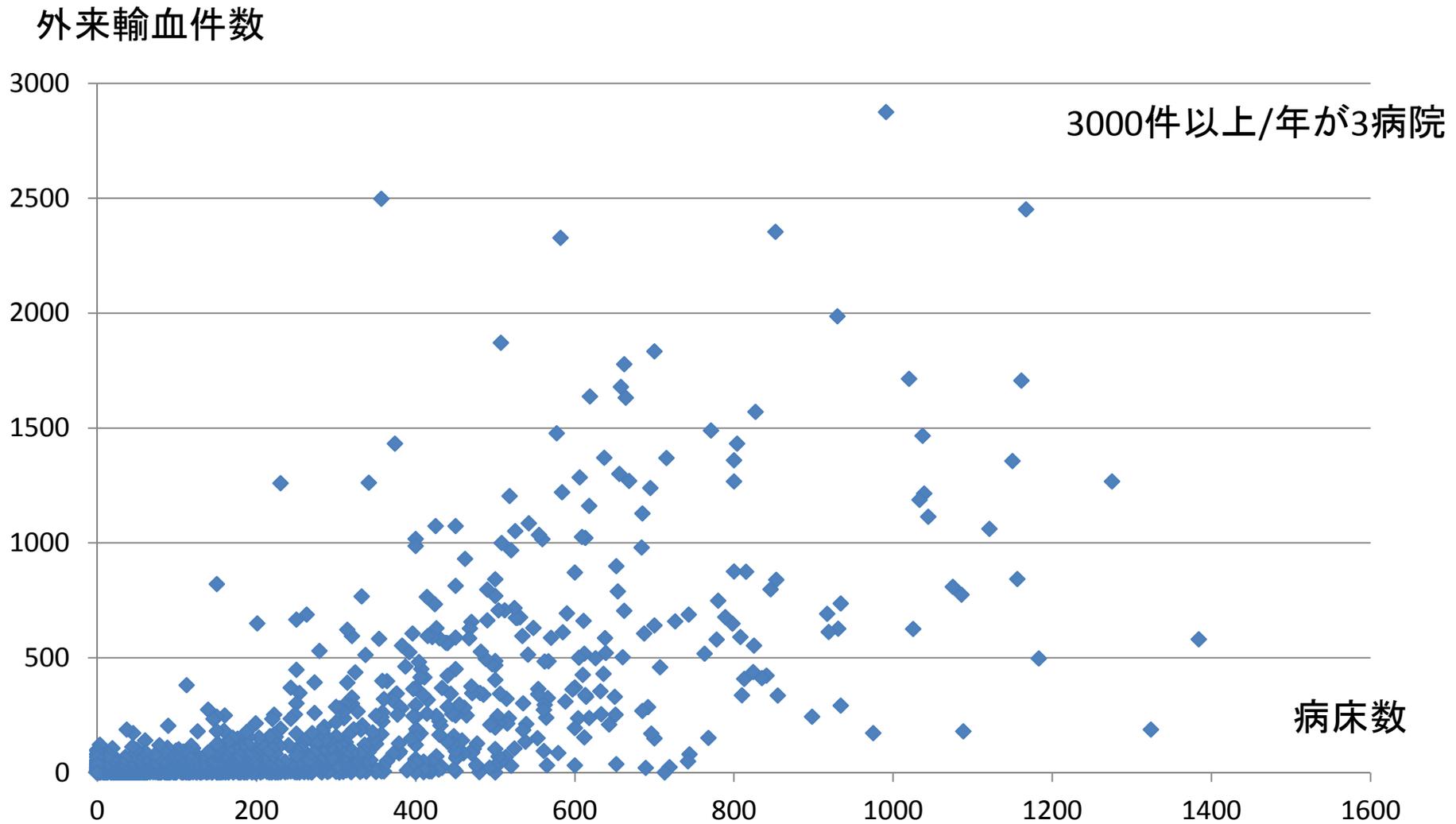
H26

- 大学病院
- 大学病院の分院
- 国立病院機構・医療センター
- 公立・自治体病院
- 社会保険関連病院
- 医療法人関連病院
- 個人病院
- 診療所
- その他

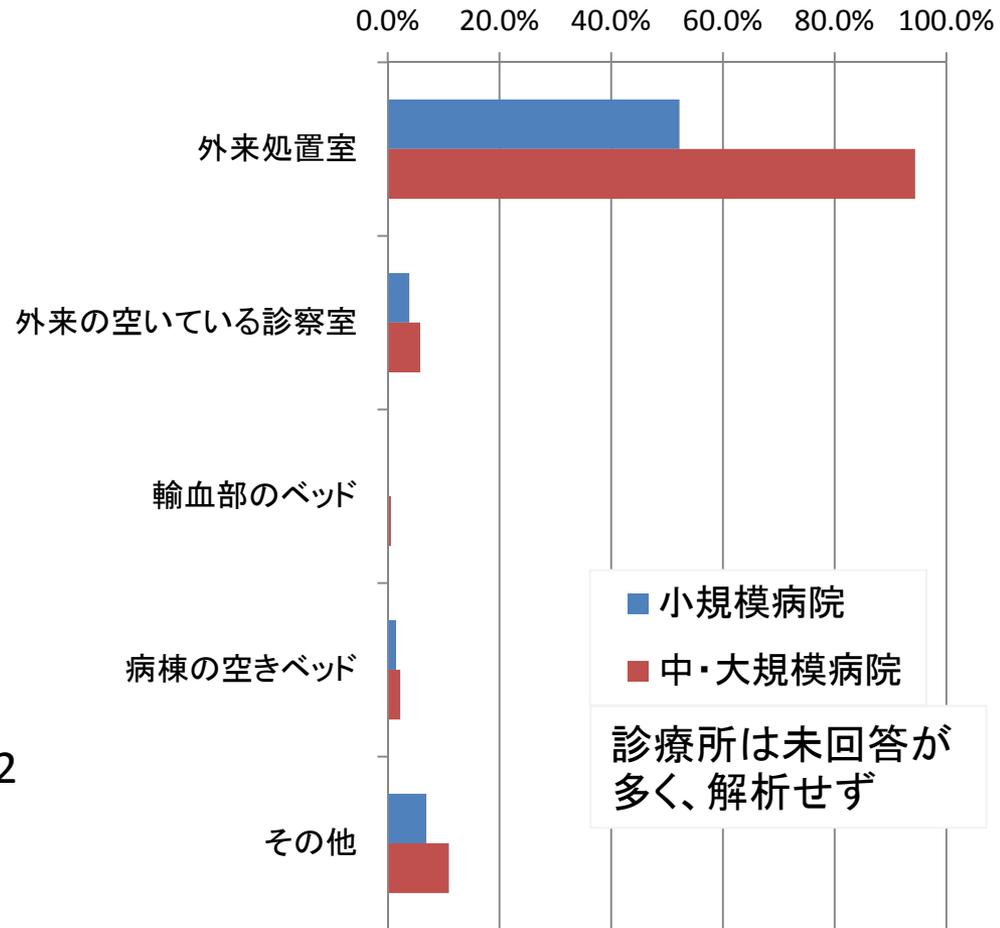
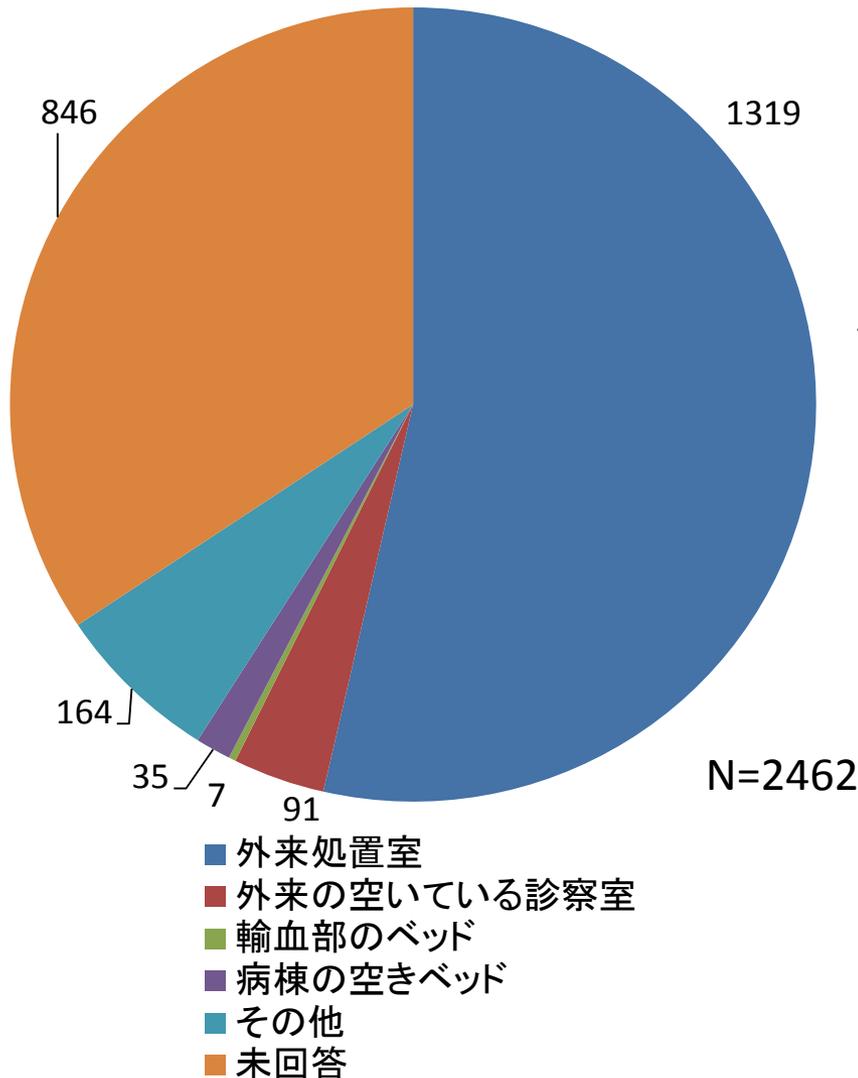


H27	500床以上	300-499床	200-299床	100-199床	20-99床	1-19床	0床	H26	500床以上	300-499床	200-299床	100-199床	20-99床	1-19床	0床
	施設数	270	397	246	493	526	206		324	施設数	272	402	284	594	535

病床数と外来輸血件数

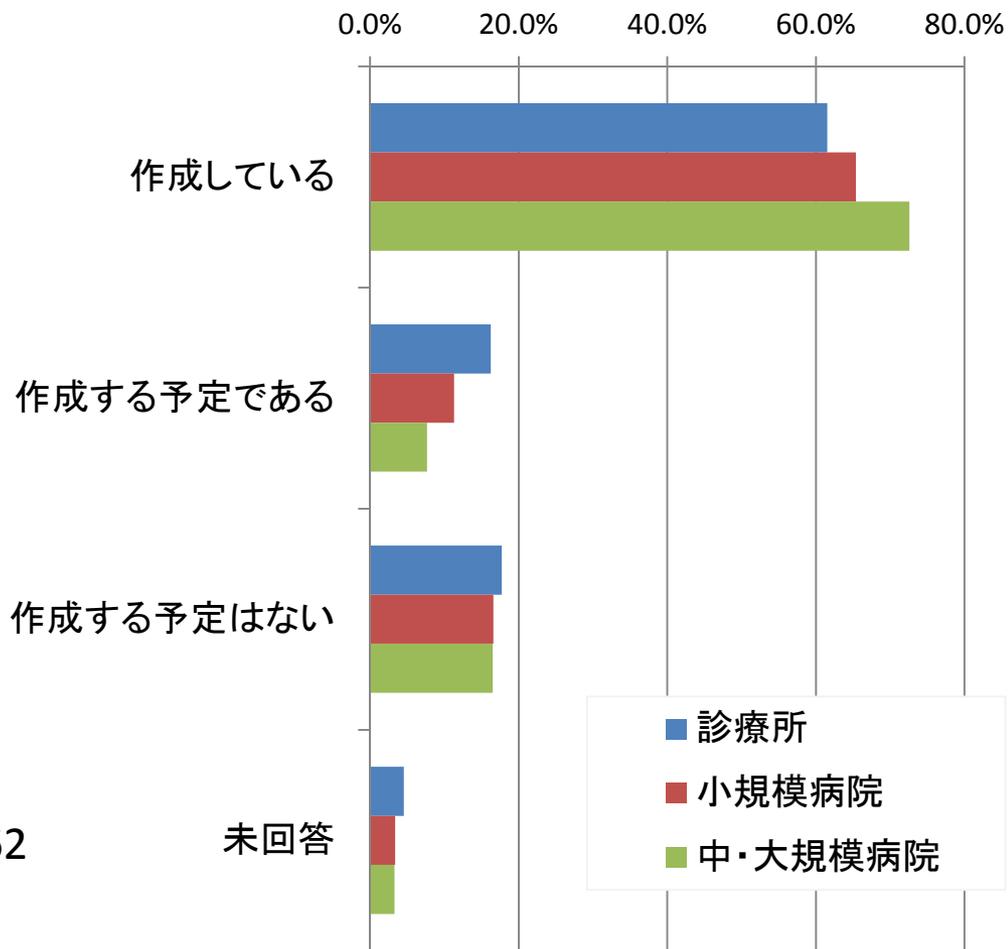
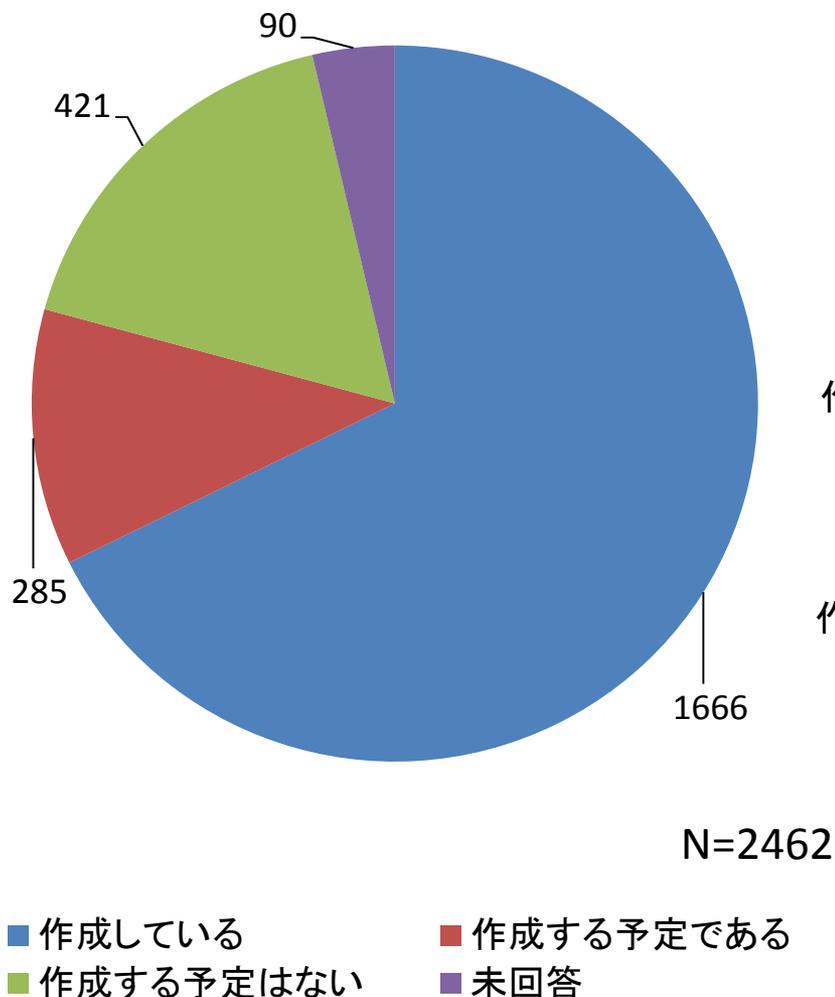


外来輸血の実施場所



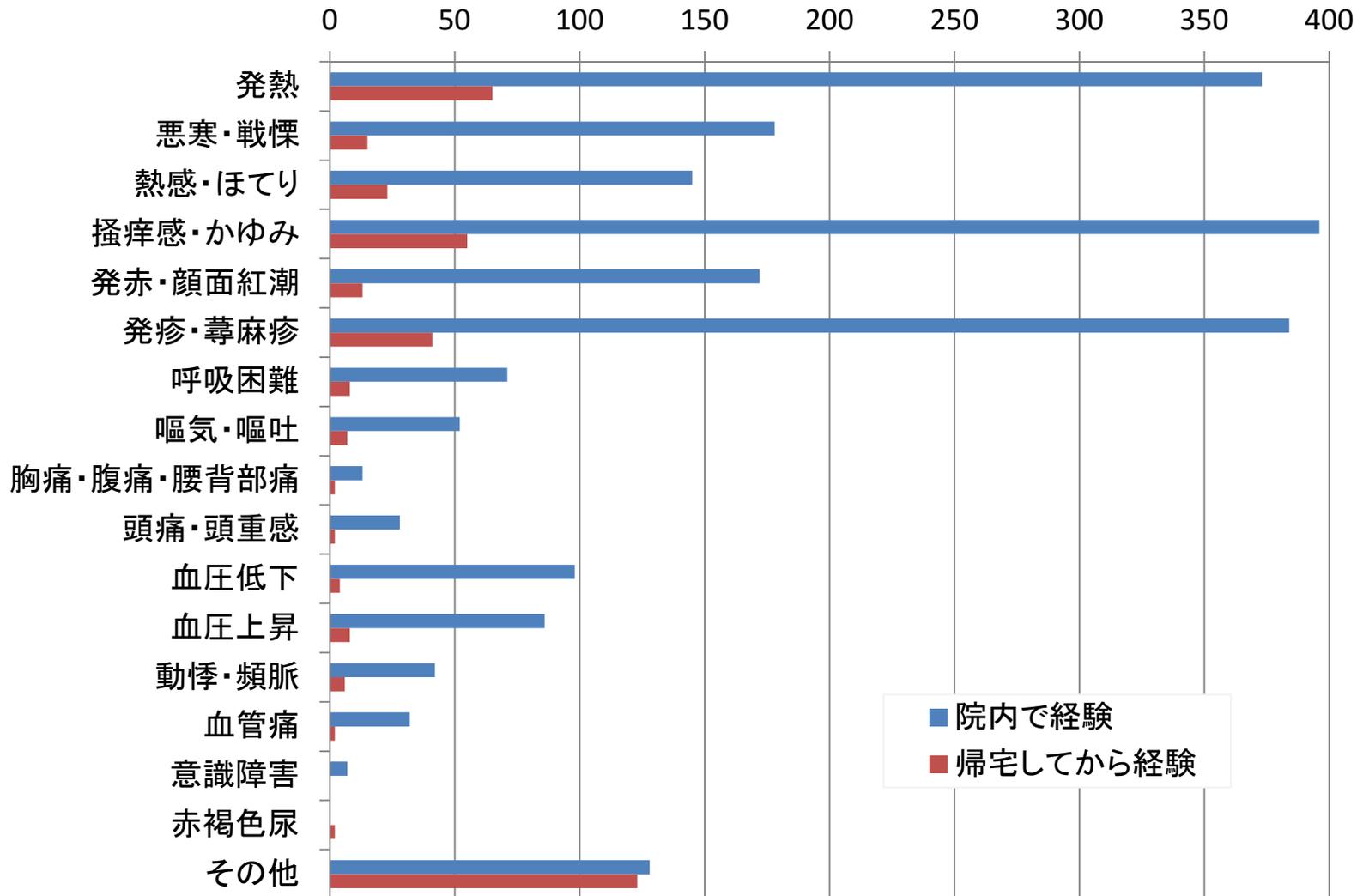
	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来で輸血する際のマニュアルを作成しているか否か



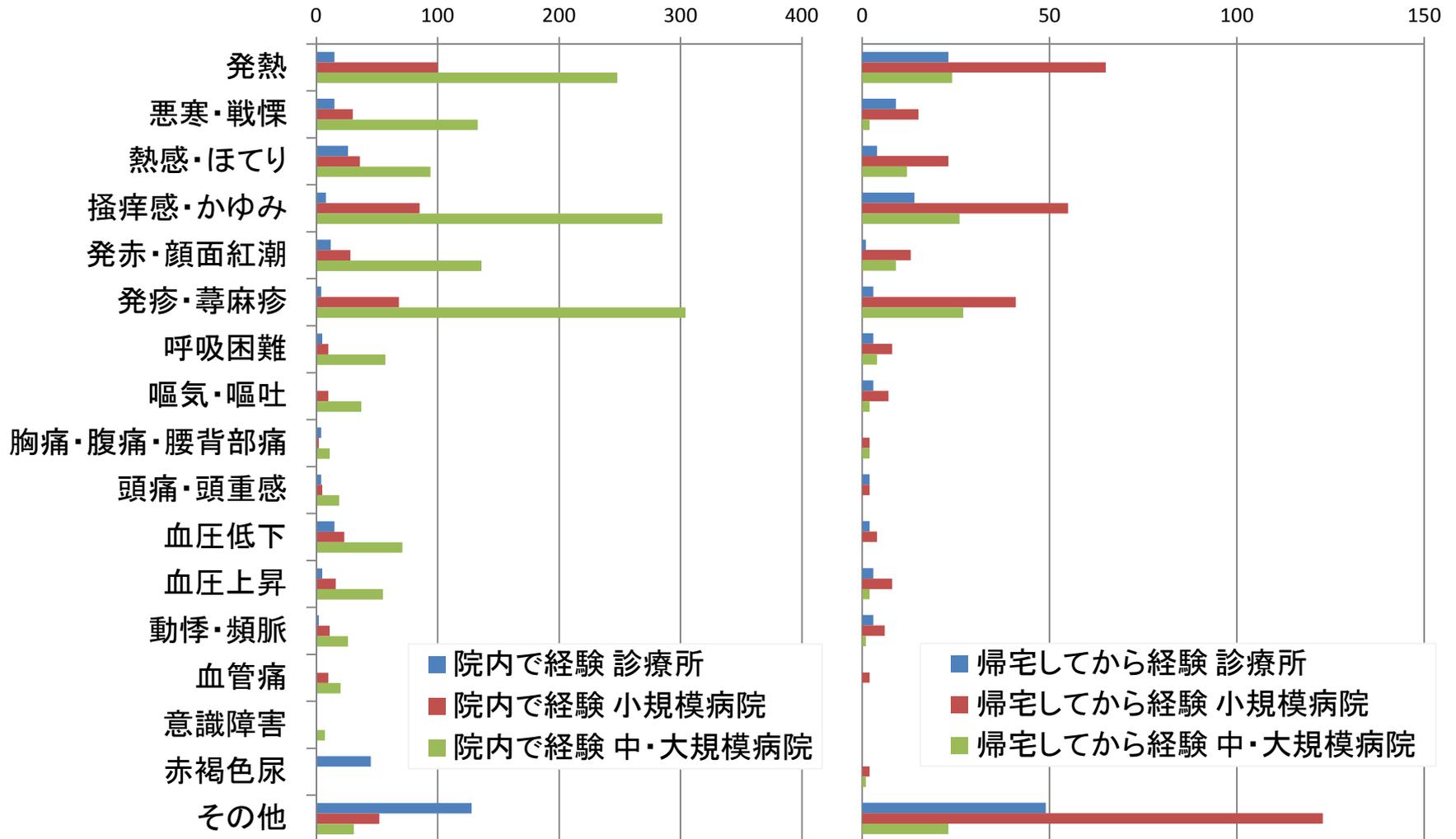
	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来輸血で経験した輸血副反応



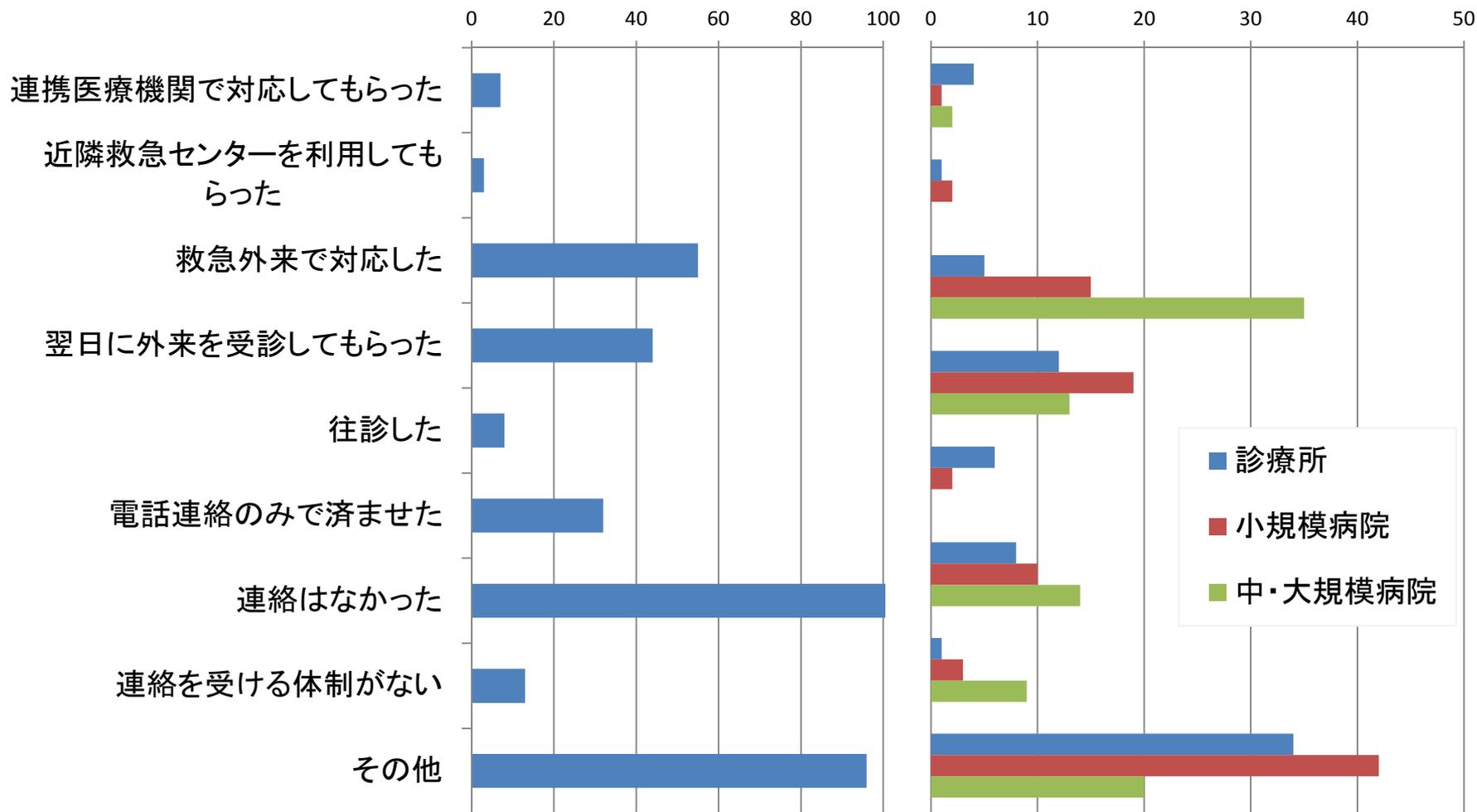
N=2462

外来輸血で経験した輸血副作用



	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来輸血で帰宅後に発生した輸血副作用への対応について



N=2462

	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

まとめ

- 平成27年調査で外来輸血を実施したと回答したのは2462施設で、平成26年調査の2602施設よりも140施設が減少した。施設形態としては、医療法人関連病院、診療所、公立・自治体病院が多かった。病床数と外来輸血件数を比較すると、病床数が大きいほど外来輸血実施件数が多かった。外来輸血の実施場所は、外来処置室が1319施設と最も多かったが、未回答が846施設と多く、病床別に診療所(19床以下)、小規模病院(20-299床)、中・大規模病院(300床以上)に分類して検討したところ、診療所530施設のほとんどは未回答であった。
- 外来輸血のためのマニュアル作成は、全体では2462施設中1666施設で作成していると回答したが、病床規模別に検討すると、作成している割合は、診療所で60%、中・大規模病院で70%であった。
- 外来輸血で経験した副作用を、院内で経験したもの、帰宅してから経験したものに分けて回答を求めた。院内で経験した副作用は、掻痒感・かゆみ、発疹・蕁麻疹、発熱が多く、いわゆるヘモビジュランスによる報告と同様であった。帰宅してから経験した副作用は、院内での経験より件数が少ないが、呼吸困難などの重篤な副作用の回答が見られた。病床規模別の検討では、中・大規模病院は院内での経験は、発疹・蕁麻疹、掻痒感・かゆみ、発熱の順に多く、帰宅後に経験した副作用も同じ順でおかった。小規模病院では、院内で経験した副作用は発熱、掻痒感・かゆみ、発疹・蕁麻疹の順で、帰宅後の副作用も同じ順であった。診療所では、院内で経験した副作用も数が少ないが、赤褐色尿が最多で、次いで熱感・ほてりが多かったが、帰宅後に経験した副作用は発熱が最も多く、掻痒感・かゆみ、悪寒・戦慄の順であった。
- 外来輸血で帰宅後に発生した副作用への対応は、全体では連絡がなかったが100施設で最も多く、救急外来で対応が55%程、翌日に外来受診が43%程であった。病床規模別に検討すると、中・大規模病院では救急外来で診察したが最も多く、小規模病院・診療所では翌日に外来を受診してもらったが最も多かった。注目すべきは、中・大規模病院の「連絡を受ける体制がない」であろうか。